

【平成23年 5月 航空隊 男性警察官（52歳）】

「達成感と無力感の交錯 ～ ヘリによる支援活動」



3月11日。震度7まで耐えられる航空隊格納庫が異様な音とともに軋み出した。瞬間的に航空隊基地が非常用電源に切り替わり、テレビでは宮城県震度7、大津波警報が発表され、航空隊は直ちに「大規模災害発生時における警察用航空機の運用方針」に基づき、30分以内の離陸を目指して準備を開始した。ヘリコプターテレビシステム搭載を完了し、長期にわたる活動を念頭に必要な装備資機材・携帯食糧を準備した。だが

情報が錯綜し、いつもなら直ちに入るはずの本庁からの直接指示がない。福島か？宮城か？岩手か...行く場所によって地図及び装備資機材の選択をしなければならない。結局、その日のうちに指示はなく、翌日の日の出とともに離陸すべく準備を整えて初日を終えた。

12日、暗いうちから宮城への出動指示が入る。ところが数分後には岩手に変更の指示があり、離陸準備完了のところ再度宮城に変更となった。

最初の目的地は仙台市の陸上自衛隊霞の目駐屯地。この一角に宮城県警航空隊がある。

仙台市に近づくにつれ雰囲気が一変した。普通なら閑散とした管制無線の交信が、飛行する多数の航空機の管制のために全く割り込む隙がない。この日は低い雲のため海岸線に沿って仙台市へ近づくが、すでに壊滅的な被害を受けた海岸部を見て、事態の重大性に気づいた。コンビナート群から立ち登る黒煙が市内を覆い、震災直後の異様な雰囲気があたりを充滿している。何とか管制塔と交信し着陸したが、広大な敷地に警察機・自衛隊機・防災機等々が離着陸を繰り返し、次々と救助した人々や負傷者を搬送して来る。それを引き継ぐ救急車がヘリの間を走り、更に多数のタンクローリーが緊急燃料給油を行っている。もはや「戦場」の様相だ。

私たちはすぐに燃料補給を終え、情報収集のために離陸した。被災地上空は多数のヘリに加え、速度の速い飛行機が縦横無尽に飛び交い、一步間違えれば空中衝突の危険性があった。実活動初日のためにまだ各機関の航空機の統制がとれていないのだ。

操縦士は他のヘリとの衝突を避けながら飛行を続け、整備士はヘリコプターテレビシステムで被害状況を撮影、同時にアナウンスをつけて宮城県警本部へと送信する。沿岸の被災した地域には木造家屋はほとんど残されておらず、唯一鉄筋の病院や学校が被害を免れていたが、その屋上には多数の救助を求める人々が手を振っている。SOSの文字も見える。

「やまどり」を見た人々が一斉にタオルや服、とにかく手に取れる物は何でも手にして必死で気づいてもらおうと手を振るのだが、残念なことにその時は救助仕様で飛行していなかった。今の装備では人一人救助することが出来ないのである。この時の空しさ・無念さは今も忘れることが出来ない。今出来ることは、この場所の状況・位置を正確に本部に伝達して、救助仕様のヘリや自衛隊機に救助してもらうことなのだ。

燃料が残り少なくなり基地に戻る時間になったが、あまりに着陸航空機が集中し、さらに重傷患者搬送機を優先して着陸させるために一向に着陸許可がもらえない。上空では燃

料切れを懸念する航空機が多数待機する状況に、これまで経験したことのない危機感を覚えた。

翌13日は岩手へ向かった。花巻空港には全国各地の警察・防災・海上保安庁・自衛隊・ドクターヘリが集結し始めた。総数は約50機。花巻空港の離発着回数はこれまでの記録をはるかに超え、同時に航空燃料の不足が懸念され始めた。実際に秋田県警航空隊にもドラム缶の供出が求められたのだが、この頃から航空機に対するバックアップがうまく機能されてきた。

米海軍の空母が沖合に係留され、万が一の場合は空母での燃料補給が可能となったり、危険物空輸の法的規制が一時的に解除されるなど、現実の航空活動に即した対応が可能となった。こうして我々の情報収集活動も順調に進んだ。

岩手の被災地は宮城のそれとまた異なったものであった。三陸海岸の特徴であるリアス式海岸では狭い湾口の奥に市街地が広がっている。そのために高さを増した津波が建物4階にまで突き抜けていた。学校を撮影するたびに、当日授業中であつたであろう生徒達が果たして無事に逃げられたのかと考えると胸が痛んだ。

また、折り重なる倒壊家屋の上に立っている人はヘリの音に頭を上げることなく、身動きひとつしなかった。確かに今、この人に声をかけることも手助けすることも出来ない無力感。緊迫した状況下で達成感と無力感が常に交錯した。

3月17日、花巻署のご厚意でおにぎり一個をいただいたが、あの状況下で他県部隊のために食料を準備して搬送していただくには、相当のご苦勞があつたと思う。また、その日の久慈市上空で秋田県部隊の車両を目にした。おそらく我々と同様の食糧事情で厳しい活動をしているのだ。

そんな凄惨な被災地の中で黙々と捜索に励む警察部隊を見ていると、実に頼もしく、何度も上空から心の中で「お疲れさま。がんばって」と声をかけ続けた。